症例報告 矯正装置が誘発したと思われる
歯周病の一症例について

勝本 正昭, 堀部 和政, 阿部 善磨, 五十嵐昭男

青 島 健

日本大学歯学部保存学教室歯周病学講座

(指導 楠 正夫教授)

One of the Causes of Periodontal
Disease Could by the Application
of Orthodontic Appliances

by

Masaaki KATSUMOTO, Kazumasa HORIBE, Yoshima ABE, Akio IGARASHI
Takeru AOSHIMA

Department of Periodontology, Nihon University
School of Dentistry, Kanda-Surugadai, TOKYO
(Director : prof, MIsao, Kusunokt)

ま え が き

最近、矯正治療を行なう患者が増加しつつあるが、これら矯正装置が原因となって誘発されたのではないかとと思われる歯周病がかなり増加しつつある。また齶蝕についてもいえることである。

今回、矯正装置によって引き起されたと考えられる歯牙ならびに歯牙周囲組織の変化に関する文献は散見するが、坂本¹⁾は歯根の吸収について治療前、中、後、についてX線写真上で調査を行なっている。

石川等²⁾も歯根の吸収について同様の調査を行なっている。山本等³⁾は歯根の吸収と歯槽骨の変化について、59才の男性で反対咬合の治療後約33年経過した例で、歯槽骨の著しい水平萎縮を認めているが、これは年令による老人性変化の一つに過ぎないと述べている。

斎藤久⁴⁾は犬による実験更に猿による実験で歯槽骨頂部附近の変化について研究したがこれは歯牙移動に伴なっておくる支持組織の変化をみている。

滝口⁵⁾は矯正的歯牙移動に伴う歯槽骨の改造機転に関する実験的研究を行なっている。犬の若犬、成犬について歯槽縁附近の歯槽壁の著明な骨吸収等について、歯槽骨に強大なる矯正力が作用すると歯槽骨はいうに及ばず歯牙自身にも著しい吸収を起すことを確認できたといっている。松本⁶⁾らは矯正中に歯肉炎のみられた空隙の症例について、いずれも治療中に空隙が閉鎖される時期に歯肉炎がみられたが、矯正治療後は消失した。

今回矯正装置によって引き起されたと考えられる全第一大臼歯に歯槽骨の垂直吸収来たした重症例に遭遇したので報告する。

症 例

患者：[REDACTED]

昭和15年5月24日生 女性

初診：昭和46年3月31日

主訴： $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ の歯牙動揺と周囲歯肉の疼痛の訴え

既往歴：生来、健康状態はよく、特記すべき事項はない。

中学生時代(10数年前)に $\frac{321}{321} \mid \frac{123}{123}$ の

歯間離開のため、歯科医に通院し1年数カ月を要して矯正治療を行なった。他の乳歯交換時期にもとくに注意して歯科で拔牙を行なった。

数年前より $\frac{321}{321} \mid \frac{123}{123}$ 部附近より排膿がみられ動揺が

甚だしくなり拔牙を行ない局部義歯を装着した。

最近1年間の間に $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ に動揺がみられ、すぐに歯科医に行ったが、処置としては歯石除去のみであった。

現症： $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ の動揺甚だしく、歯肉はやや吸収し、僅かに歯根と歯冠部の境界の露出がみられる。歯肉の腫脹および排膿、出血はみられない。

X線所見：全顎的所見では $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ 部の甚だしき垂直

性骨吸収が見られる。また $\frac{21}{21} \mid \frac{12}{12}$ 部にも垂直性吸収が見られるが他の部位については僅かに吸収が見られるぐらいである。(写真1, 写真2)

写真1 全顎X線像

写真2 $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ 部のX線像

以上のX線像の如く $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ 部にとくに垂直性吸収がめだっている。これらの原因は $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ について矯正用バンド装着による $\frac{321}{321} \mid \frac{123}{123}$ の歯間離開矯正のために行なった矯正力のためになった負担過重性吸収であろうと考えられる。

全身の所見：現在における全身の疾患については特記すべき事項はないが、臨床検査を行ない血液検査と尿検

査を行なった結果いずれも正常値を示していた。(写真3)

写真3 臨床検査として行なった血液検査, 尿検査の結果

処置：昭和46年3月31日, 日本大学歯科病院歯周科に来院し診断し, ただちにX線と臨検の指示を行なった。

その後の予定でノイマン法手術を行なうべきであったが, 動揺甚だしきため, $\frac{75}{75} | \frac{57}{57}$ を支台歯とする, 連続インレーによる永久固定装置を製作し装着を行なった。(写真4, 写真5)

写真4 $\frac{765}{765} |$ の連続インレー装着

その後1カ月半経過後に, ノイマン法手術を行なった。

その経過, 歯肉面においては1週間目での創傷部の治癒状態は良好であり, 2週間目においては歯肉の吸収も見られず良好なる治療経過をたどっている。(写真6, 7, 8)

写真5 $\frac{765}{765} | \frac{567}{567}$ の連続インレー装置

写真6 $\frac{6}{6} |$ 術前

写真7 術後2週間目の $\frac{6}{6} |$ 治療状態

写真8 6 の術後2週間目の治癒状態

1カ月後のX線像では歯槽骨の緻密化は、殆んど認められなかった。歯肉の治癒状態に反して歯槽骨が良好化されていなかった。

永久固定装置が装着されているので、今後を期待していきたい。(写真9, 10)

写真9 765 のX線像

写真10 765 X線像

結 論

1. 30才の女性に起った $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ の限局性垂直性骨吸収を示した歯周病で、その原因が矯正装置の矯正力の過大なるものによったと思われる一例に遭遇した。
2. 今後矯正装置製作上においても一考を要するものである。
3. 処置として永久固定装置(連続インレー固定法)ならびに外科療法を行なった結果 $\frac{6}{6} \mid \frac{6}{6}$ の動揺がなくなり、治癒状況はかなり良好である。
4. 術後 日が浅いので予後の決定は不能であるが、歯槽骨の再生を期待しているものである。

文 献

- 1) 坂本敏彦：矯正治療による歯根吸収の観察：日矯歯誌，17：54～62 1958.
- 2) 石川富士郎，遠藤孝：矯正治療中にみられる偶発症ならびに偶発事項：歯界展望第43巻第3号，363～367 1967.
- 3) 山本義茂，田所幹彬：矯正治療後の経過について(第11報)矯正装置による偶発事項：歯科学報，56：281～286 1956.
- 4) 斎藤 久：歯牙動揺に伴う支持組織の変化に関する実験的研究：歯科学報，46：503，671，767，945，1941，47：1，83，1942.
- 5) 滝口弘毅：矯正的歯牙移動に伴う歯槽骨の改造機転に関する実験的研究：日矯歯誌，17：141，1958.
- 6) 松本光生，作田守，滝本和男：矯正治療中に歯肉炎のみられた3症例：日歯周誌第13巻1号：14～17，1966.